

「一」 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(七〇点)

ああやっぱり今年も早々と行ってしまおう。やっぱりというのは、年の初めに予想したとおりだったからだ。

四十代の大台に乗ったとき、四十代は早いよ、と言われた。五十代はもっと早いと言われ、全くそれは正しかった。あと二年余り※1で還暦かんれきだつてき。ウツソー、と若い人を真似まねて言ってみるけれど、もうその言葉は使われていないそうだ。

① 十歳のときの一年は全人生の十分の一だから結構長い。しかし五十七歳の一年は、五十七分の一の分量しかない。

結局、時間の感覚は、記憶で作られている何かに比較されて、長く感じたり短く感じたりするのも知れない。同じ大きさの太陽が中天と山際では **A** 違って見えるように、知らず知らずのうちに、自分の記憶の総量を目盛りにして、今を測っているのだろう。

一年が早かったのはそのとおりだが、中でも極めて忙しく行き過ぎた一日と比較的ゆっくりと時が刻まれた一日がある。 **B** 忙しく行き過ぎた日の方が沢山aの仕事をしている。本を読み、そこから新作が二つぐらい出来るようなサツカクを覚え、それをメモした時点で **C** 書けたような気分になり、勢いをかりてエッセイを書き、夕方でかける前の三十分間に歳時記をペラペラめくっていると、雑誌の埋め草みたいな切れ端の時間が突然輝き出して、草蜚くさかげろうなら (i) の、卵酒なら (ii) の、※2畢生ひっせいの名作短編が生まれるような、激しい高揚に擱つかまったり。

この三十分間にはきつと、数日分のエネルギーがギョウシュクcしているのだろう。こういう日に限って、夕方から見た映画xがズンズン心に染しみてきて、人間の哀かなしさと美しさが両手に余るほど私にのしかかってきて、お酒でも飲もうものなら、喋しゃべり出して止まらなくなる。

こういう一日は、あつという間に夜になる。短い一日なのに心はフルカド^dウして、あとでメモを見るとどこが畢生の名作短編なのか首をかしげるけれど、ともかく何か多量なものが入ってきて多量なものが出て行っている。しかし何も動かない日もある。ともかく一日が長い。朝仕事机に着いたら早くお昼になってニュースを見ながらごはんを食べたいとそればかり。仕事は山ほどあるのに鉛筆を持ちたくない。誰か電話をかけて来ないかしら、と思うがそんな日に限って静かなもんだ。時間がアセリとなって降り積もっていく。一日が終わるときには、何もしなかったのに疲れ切っている。私にとっての長い一日というのは、D 最悪なのだ。

根が時間ケチだから、時間を無駄に使ったと思うぐらい自分に腹が立つことはない。^{※3}ペイした時間に対して、得たものが大きいときは、実に満足^Y。

時間というものをこんなふう実感するようになったのは、今年書いた二つの小説に関係があるかも知れない。ひとつは二百五十年昔のナポリのオペラ歌手が今の世に生まれ変わった作品で、膨大な時空間を三百数十数枚に押し込めてしまった。この中では人の一生も一幕の劇のように短い。もうひとつは、昭和三十年当時の日本を、少女を主人公に書いていて、これは私自身が九歳だったときの一年が再現されるので、一年という時間がE ゆったりと流れる。二百五十年をせわしなく行ったり来たりしていたのと違い、麦畑に寝転がり夕ぐれるまでヒバリの巣を見ていたり。

九年しか人生がない少女にとっての一年は、驚きと発見と感動と悲しみがギュウギュウに詰まった、とんでもなく大きな時間なのだ。

この年齢になっても九歳の少女のように、一年という時間をじっくり味わうことはできないものだろうか。出来なくはないだろう。あと九年の命だと判れば、一年という時間は質量を増し、以前よりも輝きを放つはずだ。人生の終点を病によって切られれば否応なくそうなる。しかし健康な人間にも必ず終点は来る。^③仮に自分の

人生は何歳で終わる、と決めて眺めるとどうなるか。終点まで生きられたなら、そこでまた新たな終点を定める。ダラダラと生きるより、一年一年を楽しめそうな気がする。

十二月半ば、クリスマスチャリティーとして小さなホールで朗読の会を催した^e。その会のために掌編小説^{※4}を書き下ろし、生原稿をオークションで買ってもらって点字図書館に寄付する趣向である。若い男性が望外の値段で落としてくれてありがたかったけれど、無理をさせたのではないかと気になって主催者と楽屋で彼と会った。彼はひどく無口で、自分の職業をなかなか明かさなかったが、最後に防衛庁の人間だと言った。

人が死ぬかも知れない場所に自衛官を送り出す後方の仕事をしています・・・何か少しでも人の役に立つならと・・・。

彼が帰って行ったあと、主催者も私もその言葉を消化できずに、考え込んでしまった。

その目が今も記憶に焼きついているのは、

I

強く暗い光がおよそ街に行く

若者とかけ離れていたからだ。

〈高樹のぶ子「時 過ぎゆくままに」より〉

※1 還暦：数え年六十一歳のこと。

※2 畢生：一生を終わるまでの期間。終生。

※3 ペイした：費やした。

※4 掌編小説：短編小説よりさらに短い形式の小説。

問一 〓線部 a s e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二

A

 s

E

 に入る最も適切な語句を、次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

(同じ記号は二度使えない。)

ア ともかく イ もちろん ウ いかにも エ もう オ まるで

問三 (i) (・) (ii) に入る季節を、次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問四 〓線部 X 「映画」・ Y 「満足」・ Z 「望外」の熟語の構成を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 同じような意味の漢字を重ねたもの。

イ 反対または対応の意味を表す字をかさねたもの。

ウ 上の字が下の字を修飾しているもの。

エ 下の字が上の字の目的語・補語となっているもの。

オ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの。

問五 〓線部①「十歳のときの一年は全人生の十分の一だから結構長い」とありますが、筆者がこう考えたのはなぜですか。解答欄らんに合う形で、文章中から二十五字以内で抜き出さなさい。(句読点も字数に含む)

問六 〓線部②「人の一生も一幕の劇のように短い」で使われている比喻の種類を漢字で答えなさい。

問七

——線部③「仮に自分の人生は何歳で終わる、と決めて眺めるとどうなるか」とありますが、「自分の人生は何歳で終わる、と決めて眺める」ことで、筆者は何ができるようになるかと考えていますか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問八

次の形式段落が本文中のどこかに入ります。本文中のどこに補うのが適当か考え、補うべき直後の五字を答えなさい。(句読点も字数に含む)

人が恋に落ちるのは、きっとこんな日だ。忙しいほど人は恋をする、というのは多分正しいのである。

問九

I に入る文として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 時間を影のあるものとして見ている イ 時間を無限にあるものとして見ている

ウ 時間を輝きのあるものとして見ている エ 時間を限りあるものとして見ている

28. 普情. 国

〔二〕 次の1～5の語句の対義語を漢字で答えなさい。(十五点)

- 1 感情 2 義務 3 供給 4 絶対 5 慎重

〔三〕 次の()にあてはまる、身体の一部を表す漢字一字を補い、慣用句を完成させなさい。(十五点)

- 1 () 持ちならない。 2 () もくれない。
3 () が棒になる。 4 () をきく。 5 () に泥を塗る。

問題は以上で終了です。

受験番号	氏名	採点
------	----	----

一	問一	a	問二	A	問三	i	問四	X	問五	問六	問七	問八	問九
	b	B			ii	Y	Z						
	c	C											
	d	D											
	e	E											
	(した)												

から。

二	1	2	3	4	5
---	---	---	---	---	---

三	1	2	3	4	5
---	---	---	---	---	---

受験番号	氏名	採点
------	----	----

③ × 5	問一	a	たぐさん	b	錯覚	c	凝縮	d	稼働	e	もよお(した)
③ × 5	問二	A	オ	B	イ	C	エ	D	ア	E	ウ
③ × 2	問三	i	イ	ii	エ						
③ × 3	問四	X	エ	Y	ア	Z	ウ				
⑤	問五	自分の記憶の総量を目標盛りにして									
⑤	問六	直喩(明喩)									
⑤	問七	一年という時間をじっくり味わうこと・一年一年を楽しむこと など									
⑤	問八	しかし何も									
⑤	問十	エ									

③ × 5	二	1	理性	2	権利	3	需要	4	相対	5	軽率
-------	---	---	----	---	----	---	----	---	----	---	----

③ × 5	三	1	鼻	2	目	3	足	4	口	5	顔
-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---